

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 14 日 10:34AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4250

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,750 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,800
(ナスダック総合) 20,700～27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

エリオット波動とは

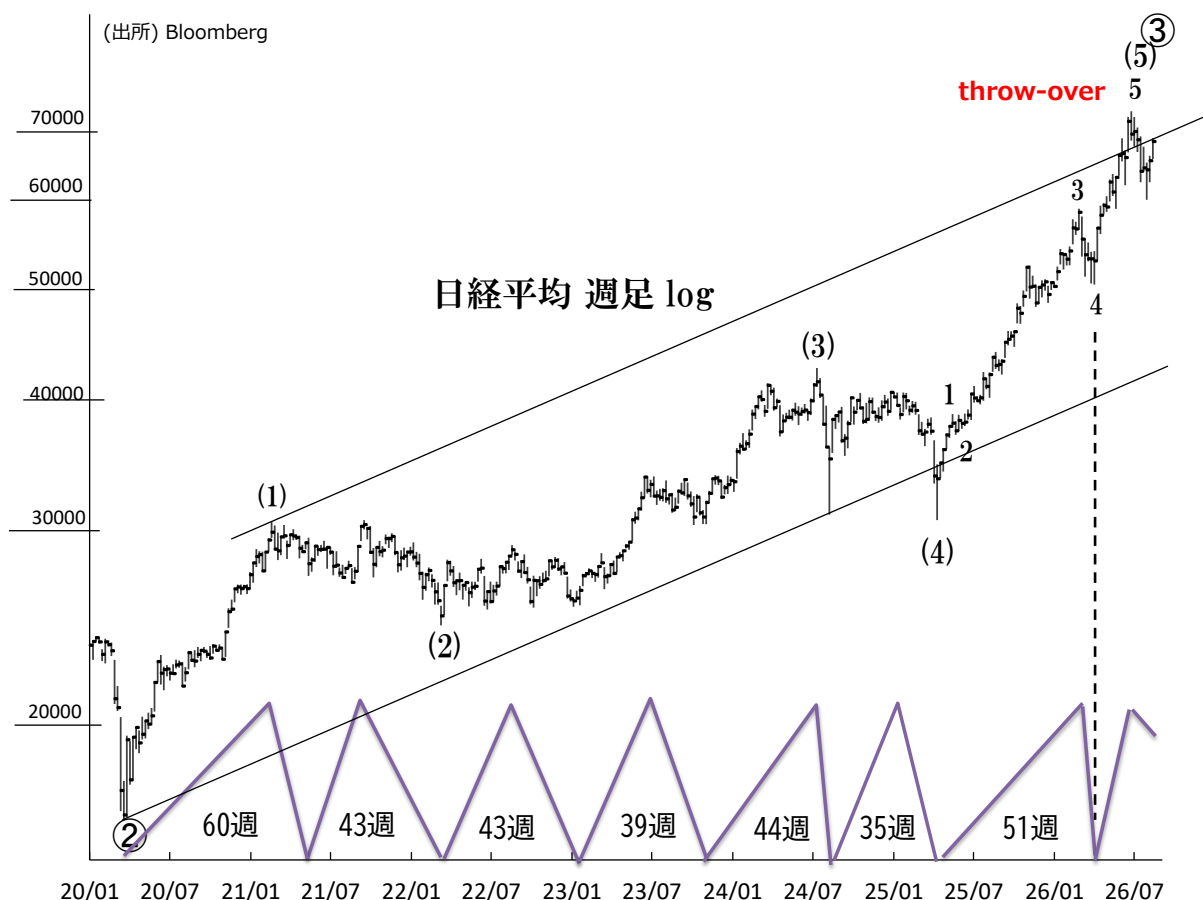
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22)はプライマリー第③波の天井であり、そこからプライマリー第④波の弱気相場が進行中とみられます。

3 月末(50,558 円)以来の現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きい(つまり上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。今サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。7 月 29 日に一時 60,448 円まで下げ、高値からの下げ率は 17%に広がりました。これは 25 年 4 月以降で最大の調整です(※2)

通常「レフト・トランスレーション」のパターンは、サイクル終点安値はサイクル始点安値を下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回らないことには現行サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。



[TOPIX]

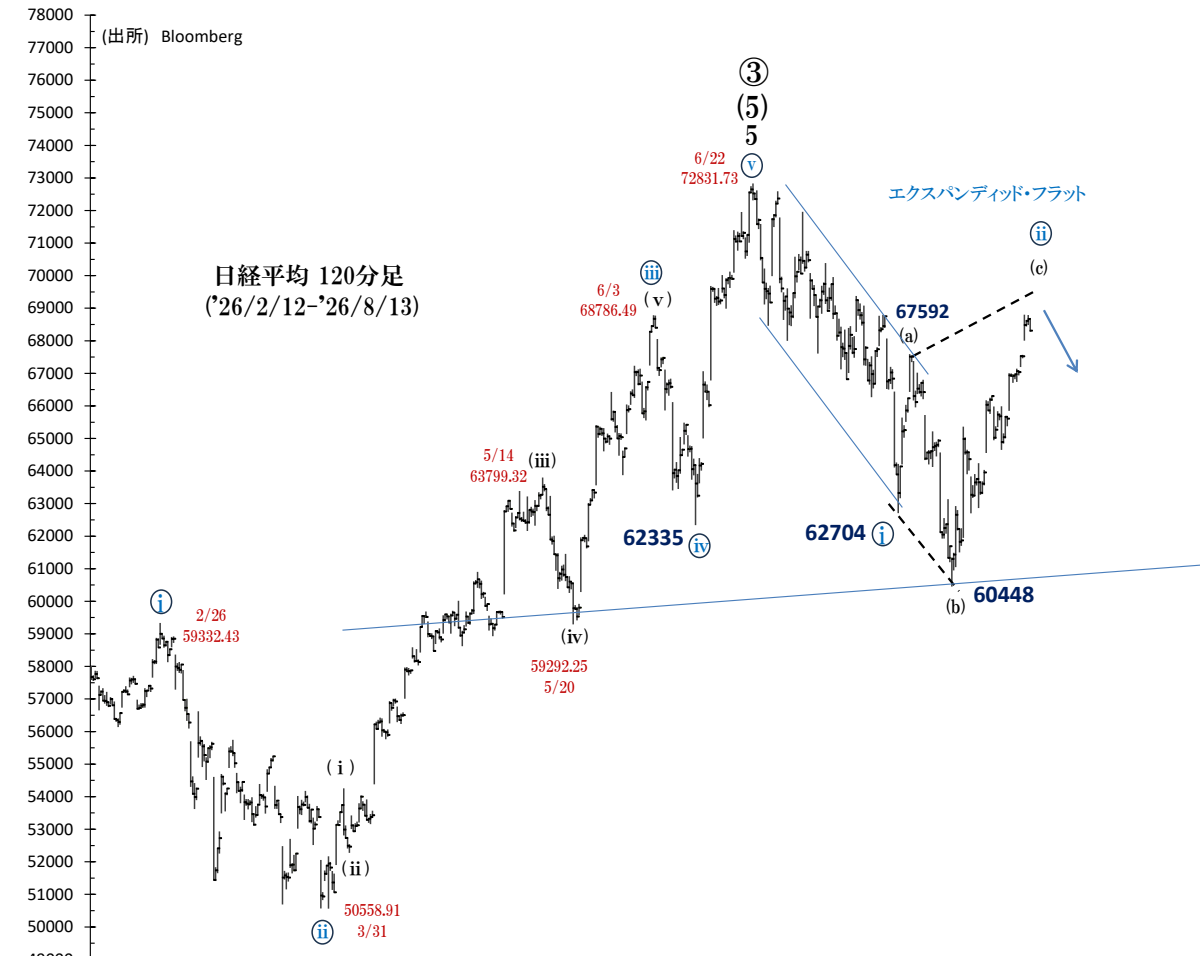
直近 TOPIX は高値を更新しました。6 月初旬からのマル iv 波は「トライアングル」となり、3,880(8/3 安値)からの上昇はマル v 波とカウントされます。マル v 波は連日の上昇となっていますが、これはトライアングル終了後に典型的にみられる「thrust、スラスト」という動きで、通常それは短命な急騰となります。つまりマル v 波は、いつ終了してもおかしくない、といえます。

前述のように、3 月末からの現行週次サイクルにおいて日経平均は高値までに 13 週かかりました。仮に TOPIX が今週(8 月第 2 週)にトップアウトすれば、3 月安値から 21 週のフィボナッチ数になります。

次に株価の先行指標である市場ボリュームをみてみましょう。プライム市場の売買代金(20 日平均)は、6 月下旬にピークを付けてから減少傾向ですが、株高は続いています。市場(TOPIX)が天井圏にあることを示す重要なサインです。

プライマリー④波入りは近づくなか、今後の下落リスクは高い。4137(7/7 高値)を割ると、プライマリー④波入りの最初の合図になります。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー第②波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、浅めといえるかもしれません。



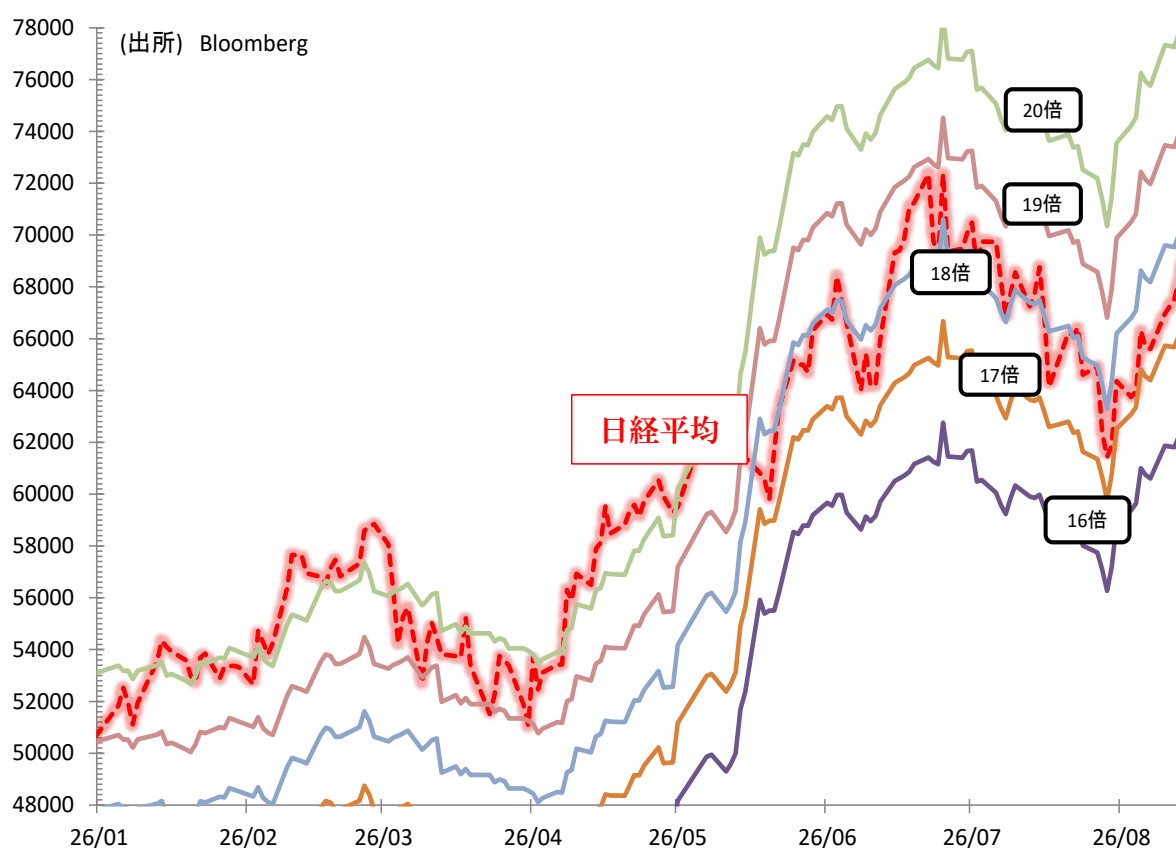
「日経平均」

62,704 円(7/17 安値)を起点とするマイニュート級マル ii 波は「エキスパンディッド・フラット」とみられ、それは完成しつつあります。

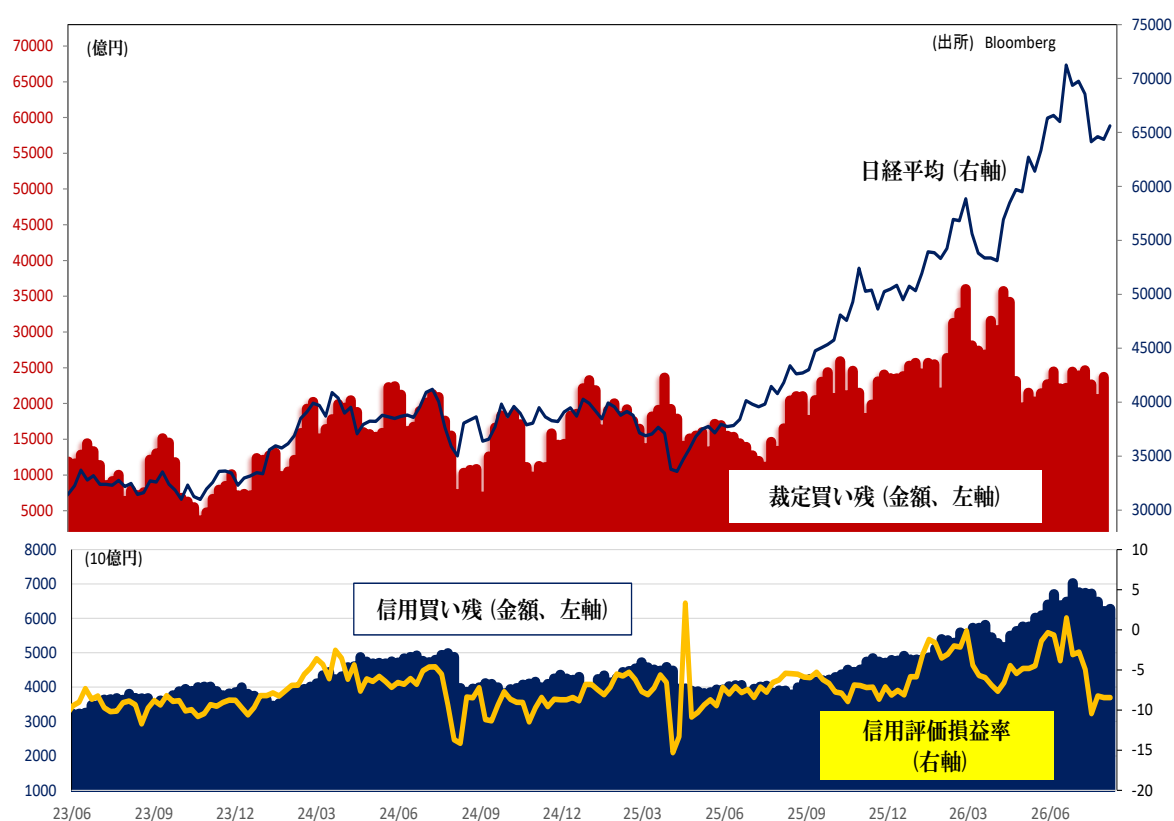
67,592 円(7/22 高値)を割ると、マル ii 波の完成を告げる最初のシグナル発動となります。現在の波動カウントが正しければ、マル iii 波の下げ波動がまもなくスタートするでしょう。マル iii 波は、60,448 円を大きく下回る強力な下げトレンドです。

「予想 PER 別の日経平均水準」

8月13日の日経平均予想PERは17.55倍、予想EPSは3892円。過去最高の予想EPSは3922円(6/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (8月7日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

8 月 4 日はギャップアップとなり、7 月 7 日高値(53,289ドル)を上回りました。翌 5 日には一時は高値 54,744 ドルを付けましたが、その後は利食い売りに押されました。なおこの日のローソク足に出現した、上ヒゲ長い「流星」は、短期的なピークアウトを暗示しています。

ダウ 30 は高値を更新しましたが、それは新しい上昇トレンドの始まりを意味するわけではありません。

ダウ輸送株平均の弱含みは続いており(チャート参照)、ダウ 30 との弱気パターン「未確認」は弱気相場
の接近を示唆しています。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月から 2 カ月近くにわたる「トライアングル」は、マイナー級の第 4 波に当たります。この基本的に横ばいのパターンから上放れた波は、マイナー第 5 波に相当します。それは 25 年 4 月からの一連のマイナーウェーブにとって「最後の上昇」であり、その完成を以て S&P500 は強気相場のすべてを完成します。

ちなみに、6 月からの 2 カ月間の「トライアングル」、そしてそこからの急激な上昇「スラスト」、これら一連の流れは本邦 TOPIX に酷似していることがわかります。

S&P500 の強気相場と TOPIX の強気相場は、同時に終了するのかもしれませんが。

直近高値の 7816(8/13)がマイナー第 5 波の終点とは確認できませんが、その可能性はあります。7,698 を割れるとピークアウトの可能性が強められます。

さらに 7,610 を割れて日足のマドを閉じると調整入りの可能性が高まるでしょう。

SOX 指数

この指数は下落トレンド中のリバウンドをやっており、今後の下落リスクは高いといえます。ひとたび下落が再開すると、9000-9500 への下振れとなるでしょう。

8 月 13 日の日中に、6 月からの下げ半値戻りを回復しましたが、終値では押し返されました。

この日のローソク足「流星」は、戻りピークを暗示しています。



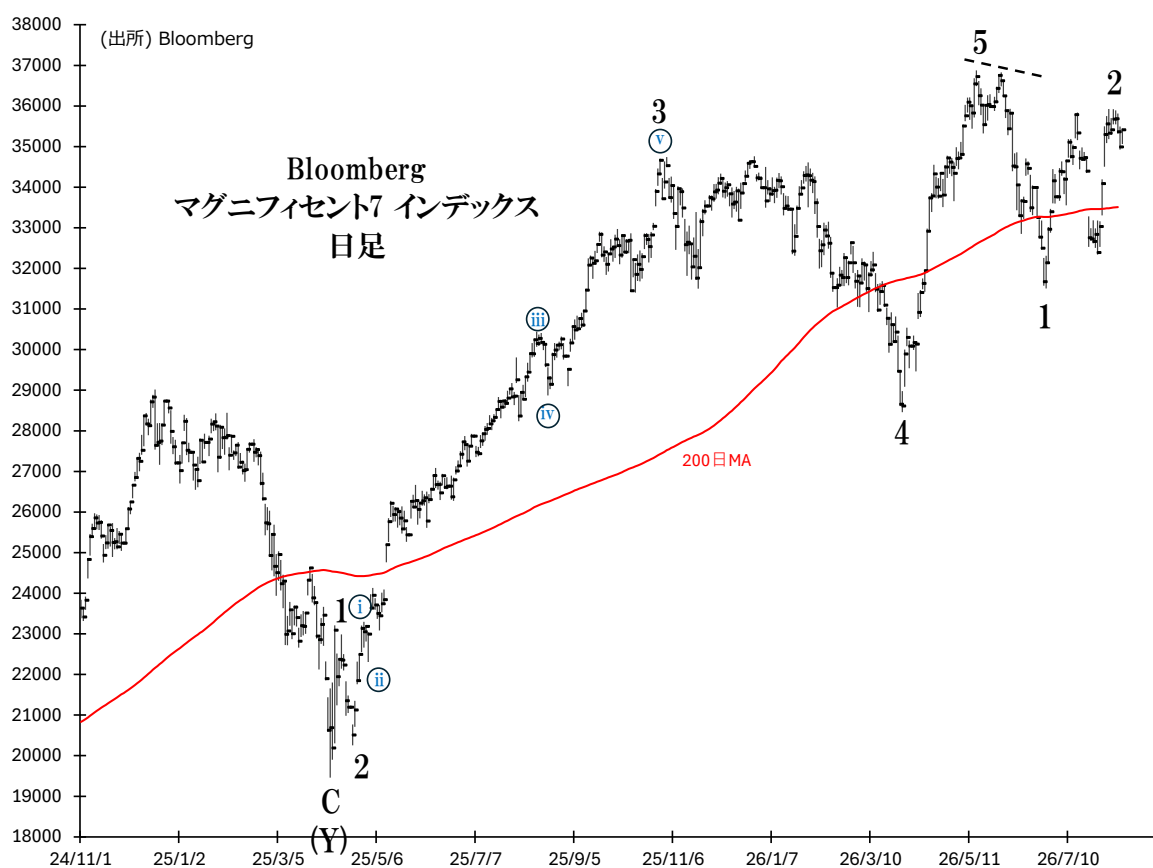
Bloomberg マグニフィセント 7 インデックス

マグ 7 は 5 月 14 日に最高値を付け、他の主要指数より先行して高値を付けています。これは重要な天井パターン(未確認)です。

8 月 5 日は一時 2 カ月ぶり高値を付けましたが、上昇を維持することはできませんでした。

6 月下旬からの a-b-c パターンによるリバウンド・第 2 波は完成した可能性があります。

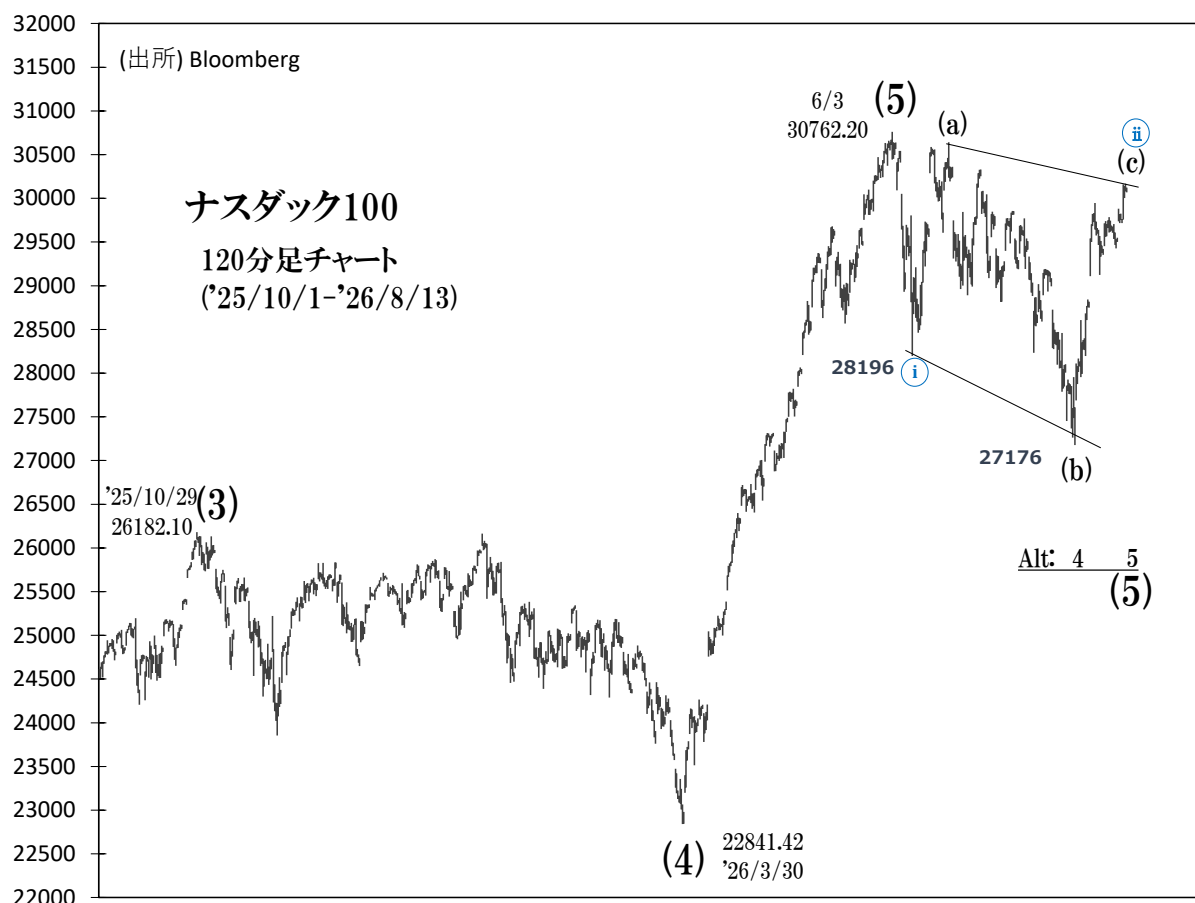
そうだとすると、第 3 波の強力な下げがまもなく始まることでしょう。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,196(6/9 安値)からのマル ii 波は、終わったか終わりつつあります。

マル ii 波完成後、次はマル iii 波による下落に移りますが、それは 27,176(7/30 安値)を大きく下回る、強い下降波になります。

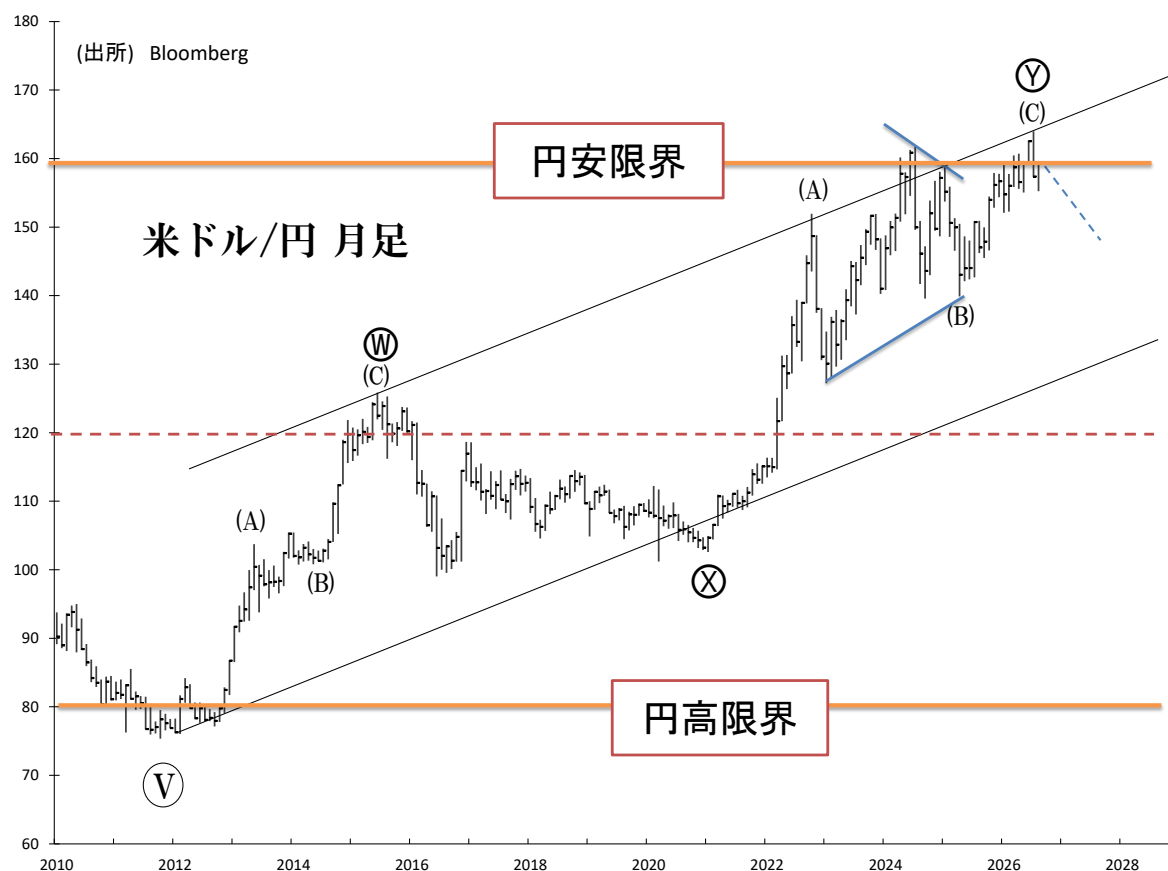
なお今月の上昇は想定を上回る規模に拡大しています。このことから、次に示す代替カウントも現行カウントと同列で捉える価値がありそうです。

(オルタナティブカウント、Alt)

27,176 からは第 5 波による上昇であり、それを以て第(5)波天井も完成します。

本来的に第 5 波は高値を更新するべきものではありませんが、今回はその限りではありません。SOX 指数の潜在的弱さは、ナスダック 100 の第 5 波を短縮させる(truncated-fifth)可能性を秘めています。どうか、見てみましょう。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在1ドル=141円程度です。日本円は1年以上も、金利差からの妥当な水準より極端に過小評価された状態です。

購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで1ドル=97円～103円です。長期的にも日本円は著しく過小評価されています。

163.944円(7/23)を以て、通算5年間の①波[(A)-(B)-(C)]による円安はすべて完了したと思われます。この見方によると、この先は数年間にわたり円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7月末実施の15年ぶり日米協調介入(円安阻止の目的では28年ぶり)は、163-165円の「ベッセント・シーリング」を築きました。

今回の介入目的は過剰な円安を阻止することであり、円高トレンドへの転換を狙ってはいないでしょうが、円安の限界点(160円前半)が明示された当然の成り行きとして、(最初は徐々に)円高志向を強めることになるでしょう。

筆者は今後数年内に、1ドル=120円-125円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80円-160円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

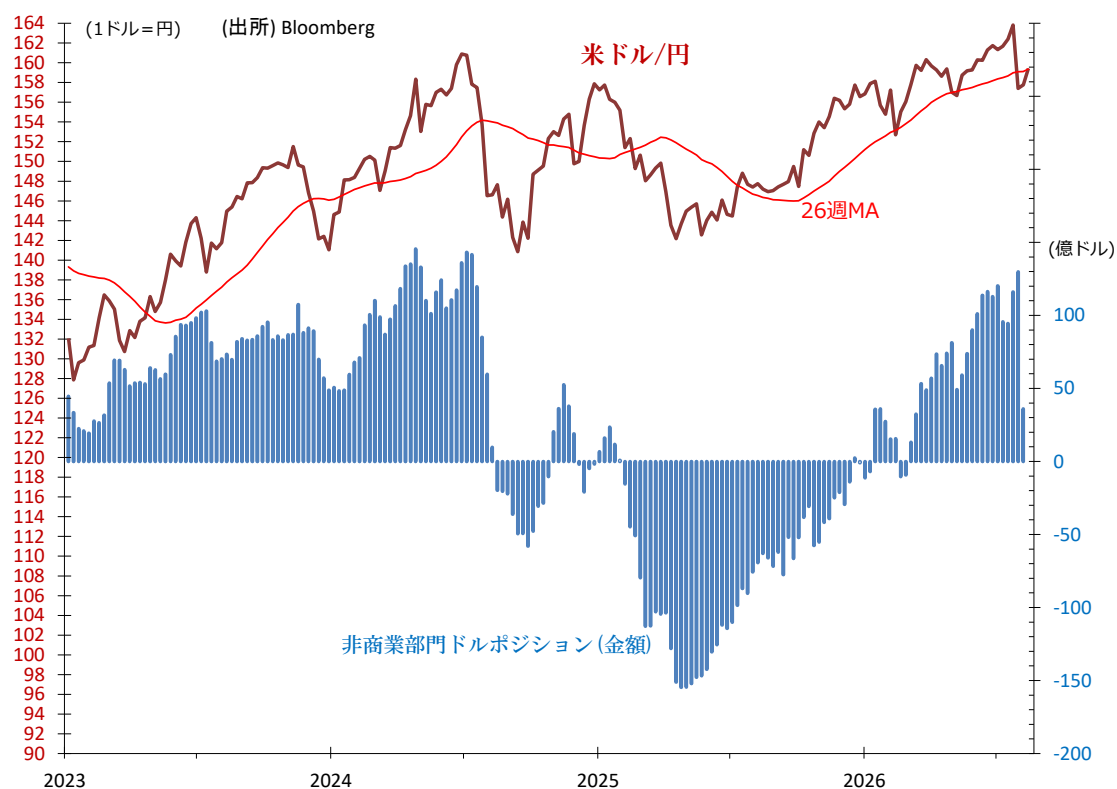
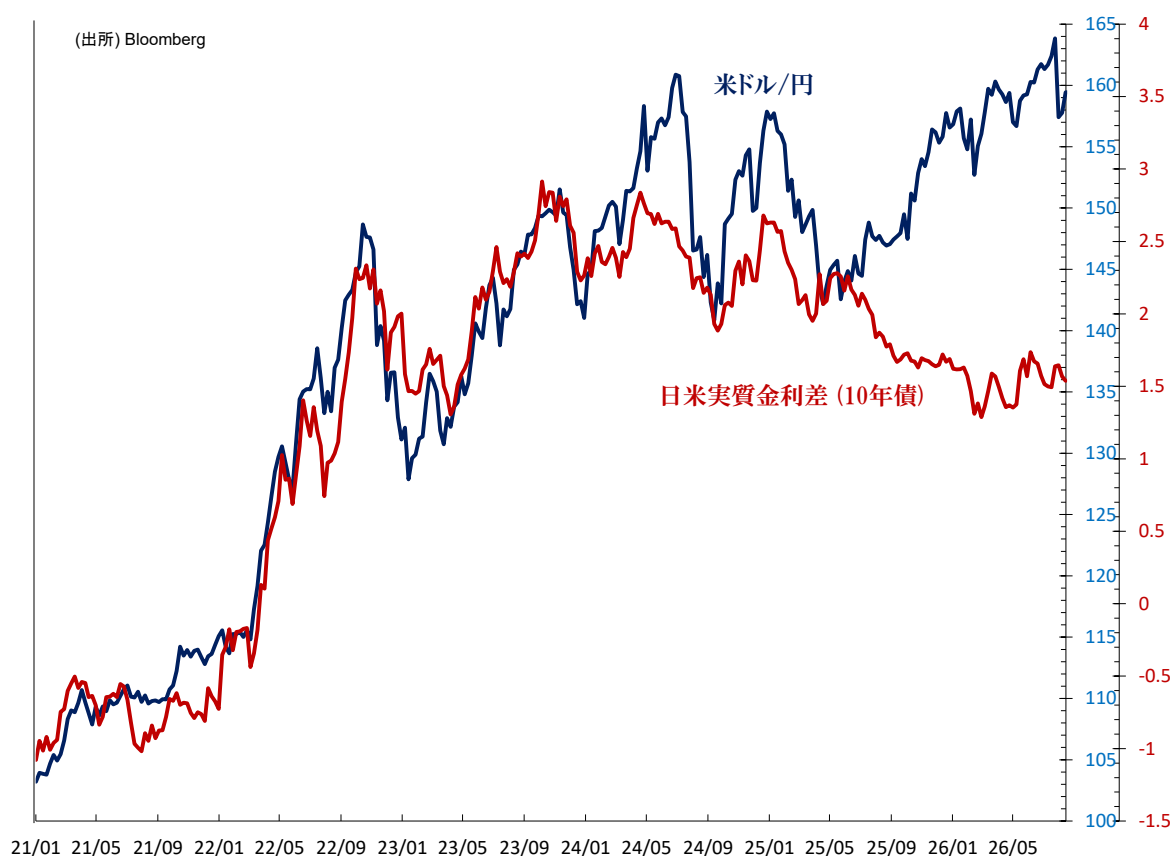
ドル/円の歴史を振り返ると、大きなトレンドが変わるときの最初のきっかけのほとんどは、為替介入それも協調介入でした(85年9月のプラザ合意など)。7月末の日米協調介入のインパクトは極めて大きいといえましょう。

8月3日は一気に円高が進みましたが、レッサー・ディグリー第4波・154.983円の手前からは円安になっています。この足元の円安は、ヘッド・アンド・ショルダーズの右肩トップを作るでしょう。

今後 157.30 円を下回ると、円高の動きは再加速し、ネックラインの 155 円突破を試す局面を迎えるでしょう。8 月中に 150 円水準を試す展開もあり得ます。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[141.188 円]です。



円売り持ち高が2年ぶり高水準から急減 (2026年8月4日時点)

IMM 通貨先物市場での投机筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の129.77億ドル(2年ぶり高水準)から36.0億ドル(26年3月以来の低水準)に急減しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

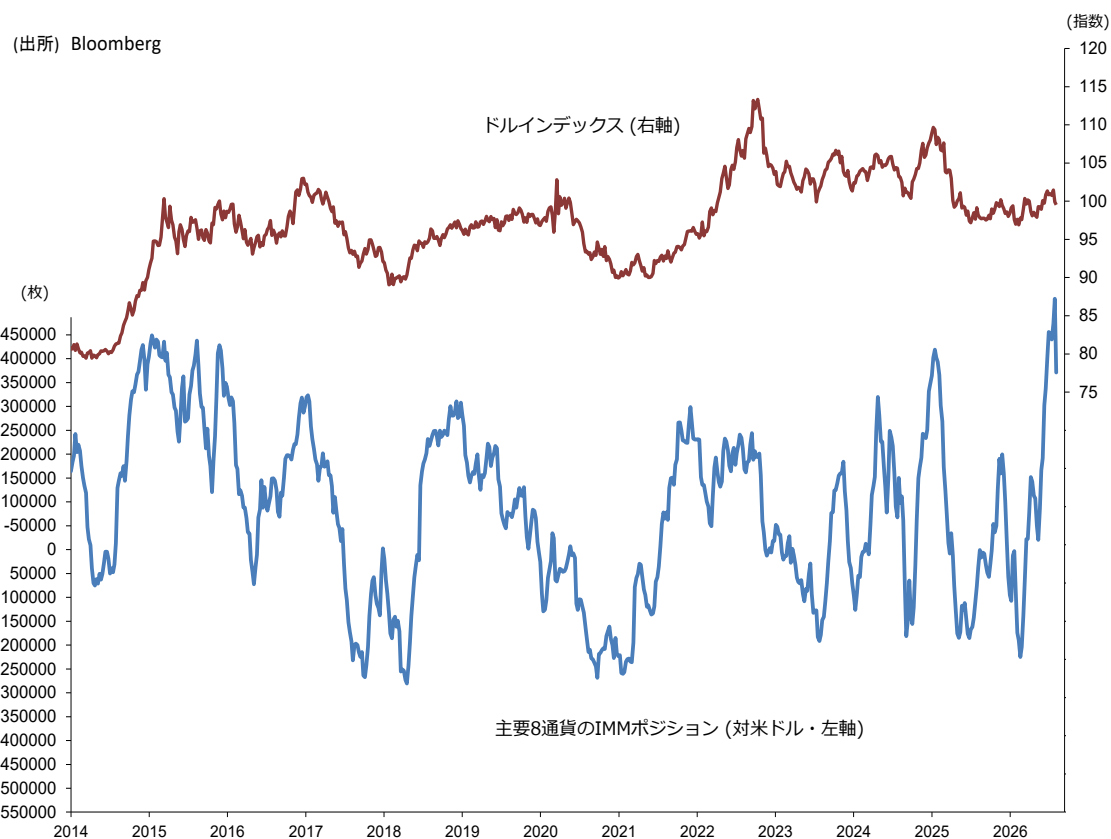
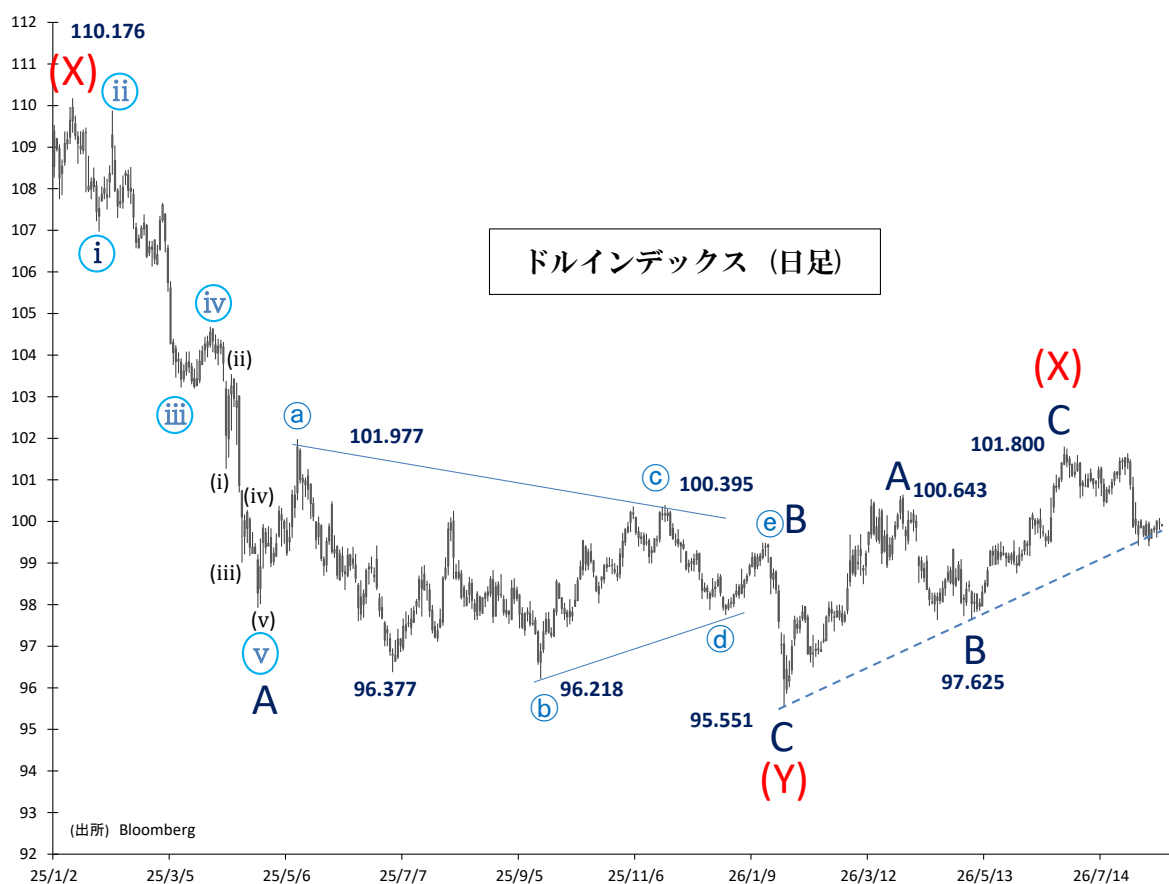
22 年 9 月高値からのドル安③波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っているとみられます。長期タームの見通しは引き続きドル安です。

今年 1 月安値からのドル高は、③波中の(X)波であり、それが終わると、次は 3 番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われます。

6 月 24 日の高値(101.800)は、ターゲット[101.138-102.717]内で付けました。(X)波が終了したという見方が正しければ、この先も持続的なドル安になるでしょう。投機筋によるドル買いの極端な多さは、筆者の見方を裏付けているように思われます。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は 3 週ぶりに減少

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、8 月 4 日時点で 37 万 1145 枚と、前週の 52 万 5546 枚(過去最大)から縮小しました。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
